
好きな人

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな人

【Nコード】

N6030Y

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

たくさんの短編集を書きたいと思っています!!
誤字脱字目立つと思います!

Happyウエディング！

ずっと待ってたこの日。

俺と蘭が結ばれるこの日。

蘭に気持ちいを伝えた時の日を思い出す。

俺がコナンから工藤新一に戻った時、蘭は泣いて喜んで、真実を聞いて泣いて許し、やさしくだいてくれた。

蘭は強かった。

でも、蘭は泣いて泣いて・・・

そつ、泣かしている張本人はこの俺。

だから、蘭に気持ちを伝えた。

蘭が俺のことが好きではないなら、もう蘭を泣かせないため、消えようと思っていた。

でも、蘭は泣いて「私も好き」と言っていた。

その時、俺は半ば無理やりのキスをした。

その後、蘭と楽しく話していた。

その日から一年たったこの日。

ついに俺達はこの日を迎えたのだ。

今俺はウエディングドレス姿で来る最愛の人を待っている。

彼女を幸せにして見せるのだ…

信じているからね（前書き）

WISHO2さんからのご提案です！

変なところがあるかもしれませんがよろしく願いします！

信じているからね

「はぁはぁはぁっ！」

新一はある場所へと全速力で走っていた。

ずっと自分を待たせ続けた最愛の人に会いに行くため、こんな夜中でも走っていた。

小さく街灯が新一の体を光らせていた。

汗はたくさん。もう体がへとへとになるまで、最愛の人のところに向かっている。

最愛の人の家の前まで来ると、新一はたくさんインターホンを押した。

強く願っていた。

最愛の人がもう誰かのことを好きになっっていないか、自分のことを忘れていないか・・・

「はい！」

中から最愛の人の声がする。

新一はその声にはあつと顔を明るくした。

最愛の人はドアを開けると新一の姿を見た途端、一瞬にして涙があふれた。

「蘭…ごめんな…」

「バカ…何してたのよ…ずっとずっと待ってたんだからあ！」

蘭は新一に抱きついた。

新一はいきなり蘭が抱きついたので驚きだったが、そのうちに、自分がコナンだったこと、トロピカルランドのこと・・・たくさん

のことを話し始めた。

蘭は何も言わず黙って聞いていた。

「本当にごめんな…」

「バカ…謝らないでよ。新一は悪くないじゃない。私は新一が戻ってきたことだけでうれしいよ?」

新一は蘭の言葉にありがとうと言い、半ば無理やりの口づけをした。

「蘭…好きだ…この地球上の誰よりも…」

新一は穏やかな声で蘭に告げる。

蘭は泣きながら「私も…好き」と言った。

新一はよかったとつぶやくともう一度蘭の影と重なった。

この記念すべき日の一年たったこの日。

今日は二人の最高の思い出となる日が生まれる。

2人は神父さんの問いに同じ答えをした。

そして、蘭は庭に出て、ウェディングブーケを投げた。そのブーケは園子へと渡って行った。

園子は嬉しそうにブーケを握りしめた。

蘭もうれしそうにほほ笑む。

「なあ蘭。俺、本当に蘭の隣にいていいのか?」

いまさらといつていいほどの時間で新一が蘭に聞いた。

蘭はあっけらかんと言いたそうな顔で答える。

「あたりまえじゃない。私は新一じゃないとだめなんだよ?」

そして、優しい笑顔を見せながら、新一の頬にキスを落とした。

新一は顔を赤くしていた。必死でポーカーフェイスを保とうとしているがもう駄目である。

そして、新一は蘭をお姫様だっこして車に乗せ、工藤邸へと向かった。

こうして、2人の記念すべきは迎えられたのである。

「ねえ新一。今も私のこと愛してる？」

子供に恵まれた蘭はアルバムを手にしながら新一に聞いた。
新一は何も言わずにいきなりキスをする。

「こういうこと。」

新一はそういうと蘭を抱きしめた。

「愛してるよ…ずっと…一生な…」

穏やかな声で言う新一。蘭は嬉しそうに
「私も愛してるよ…」

と囁いた。

信じているからね（後書き）

どうでしたか？

ちょっと変でしたかね…？

勝てない(前書き)

オリキャラ登場ということですよ！

勝てない

私の名前は清水亜海。

元気で明るい女子高生です！

そしてそして、私に初恋が訪れました！

お相手は工藤新一君！

私は新一君って呼んでるの！

でも、私にライバルがいる。

毛利蘭。

超嫌い！新一君にべったりしちゃってさ！

私の新一君なのにいゝ！

「新一君！亜海のこと好きい！？」

「好きじゃねーよ。」

「むうゝ！」

まあいいわ。きっと好きになるはずなの！

「蘭！今日のご飯ハンバーグな！」

「わかったわよ。」

ちよつとまってえー！なにになに！？何で毛利さんに聞くわけえゝ！？？

私は適当に底ろにいる人に聞いた。

2人の関係は何なのかと…

「夫婦よ！夫婦！」

ふう・・・ふう？

私の心の叫びが口に出そうなくらい大きなものだった。
夫婦になっていたとは…

そうして、私の初恋という花は一瞬にして花びらへと変わり、散ってしまった。

でも、毛利さん。やっぱりライバルなのよ！？
毛利さんよりいい恋見つけるんだから！

勝てない(後書き)

最後はハッピーエンド!?

作品のネタくださーい!
ネタ切れ中の鈴蘭です…

長年の初恋（前書き）

もしも、園子が新一のことが好きだったらという話を書いてみました。

でも、新蘭です。

園子と蘭の友情が深まる話ですね。

長年の初恋

私の名前は鈴木園子。

鈴木財閥の一人娘。

私は長年の初恋をしてきた。

そして、つい最近その初恋は終わってしまった。

私の初恋の人が私の親友と付き合ったのだ。

幸せそうな顔をして。

憎んだ。

私の親友を憎み憎んだ。

好きな人を奪った親友を恨んだ。

でも、彼女に勝てるはずがないの。

女の子がほしそうなものをすべて持っている彼女にはだれひとり勝ったことはない。

おまけに、天然で優しくて…

最高の人。

「園子…！」

「蘭…」

「新一！帰ろうよ！」

蘭は新一君を呼んでいる。

つい最近、蘭と新一君は付き合った。

そして、私の初恋は一瞬にして砕け散った。

そう、私の初恋の人は新一君なのだ。

蘭は私の親友。

「おうっ！」

かつこいい新一君。

その彼を手にした蘭。

2人とも幸せそうだった。

私には到底無理みたいだね…

「園子、聞いて！新一がねっ！」

下校途中、蘭が新一君のことで話していた。

新一君もけらけら笑っていた。

私は無理して笑っている。

2人の幸せ話なんか聞きたくない。

「.....じゃないわよ...!」

「え.....?」

とうとうブチ切れた私。

もう…

とまることはないだろう…

「ふざけんじゃないわよお！……！……！……！」

「園子…?!」

「何よ！幸せそうな顔して！私の幸せを奪って！！」

好きだったのよお！新一君があ！蘭に新一君を奪われるなんてえ！

！蘭のせいよお！蘭の…蘭の…！！」

「園子・・・」

私は泣きながら叫んでいた。

新一君は驚いて何も言えない状態。

蘭も同じ様子だった。

「蘭っ！あんたなんかあ…！あんたなんかあ・・・！！」

「園子おおお！……！！！」

いきなり蘭が叫んだ。私ははっと我に返る。

蘭が叫んだのは私を止めさせるためであろう。
私はどうしようもなくなってその場に崩れ落ちた。
そんな私を蘭はやさしく抱いてくれた。

蘭はやさしかった。
そして、強かった。

私には到底できそうにないことを持っている蘭がうらやましかった。
だから恨んで憎んでいた。

「園子・・・！ごめんね・・・っごめんね・・・っ！園子の気持ち・・・
考えなかったね・・・っ本当にごめんね・・・っ」

蘭も泣いていた。私は蘭の温かい優しい心に静かに包まれていった。

蘭にひどいことをした。
蘭をすごく傷つけた。
謝らなければ・・・

「蘭・・・っ！新一君！ごめんなさい！私・・・」

「園子は悪くない！悪いのは私。新一だって悪くないの。私が園子の気持ちを考えなかったからいけないかったのよ！」

「蘭：俺も悪かったな、園子。」

蘭：新一君：

私：「どんだけ幸せ者なんだろう？」

気づいてなかったただけなんて：

バカだな：私：

「新一君っ！蘭を幸せにしないと、私がとるからね！」

長年の初恋（後書き）

園子と蘭の友情。

新一も今や、温かく見守っています。

蘭の優しさを書いてみました。

小さなLove letter (前書き)

新一が小さい頃に蘭にこっそりあげたラブレターです。
蘭は未だにわかっていません！

小さなLove letter

今日は満月。

新一が窓を開けて、空を見上げた。

空は濃い藍色をして、今にも新一を包み込みそうだった。

蘭と結婚して、二年たつ。

新一は毎日幸せな日々を過ごしていた。

隣で寝ている蘭の寝顔を見て小さくほほ笑む新一。

そんな新一はまた、夜空を見上げると、自分たちが小学二年生のことを思い出した。

「はいみなさん！きょうは、お友達におてがみをかきましよう！」

「はい！」

みんなが一斉に手を上げてこたえる。

そのなかでも、1人、つまらなそうにあくびしている少年がいた。

「ちよつとしんいち！ちゃんとききなよ！」

「へーへー！それで？おまえはだれにかくんだよ？たしか、2人まですだったよな？」

「うん！しんいちと、そのこちゃんだよ！？」

蘭は嬉しそうに話した。

新一も少し顔を赤くしていた。

「しんいちは何にかくの？」

「サッカーともだち。」

「わたしには？」

「かかねーよ」

「ひどーい！わたしはかくのに！？」

「だーっ！うつせーな！」

新一はそれだけ言っていると教室から出て行った。

ちょうど休み時間だったので、怒られなかったが・・・。

「しんいちの・・・ばか・・・」

蘭はそれだけ言っていると園子のほうへ向かった。

そのあと、学校が終わると蘭は一人で帰っていた。

新一と帰りたくなかったのだ。

あんなことを言われてきつと怒っているだろう。

蘭はずっと自分を責めていた。

「しんいちにかくの、やめようかな・・・」

ぼそつと言った。蘭はどうしようか迷ったけど、やっぱり書くことにした。

新一とは幼馴染だから書きたかったのだろう。

『しんいちへ

きつときのうのことでおこっているとおもいます。

ほんとうにごめんなさい。

わたしはただ、しんいちにかいてほしかっただけなの。

ごめんね、じぶんかってだよね？

しんいち、こんなわたしだけど、いつまでもわたしといっしょにいてください。』

蘭はそう書くと、先生に言われたとおり、新一や園子家のポストに入れた。

蘭は次の日、学校に行くのが怖かった。

新一に怒られそうで、新一が無視しそうで。

でも蘭は行くしかなかった。

そして、学校に着くと、新一は何もなかったように接してくれたのだ。

「しんいち、てがみよんでくれた？」

「ああ、ありがとな。」

ちよつと顔を赤くする新一に蘭は嬉しそうにありがとつと言った。

しかし、蘭は気づいてくれなかった。

自分の家のポストに新一からの小さなラブレターが入っていたことを・・・。

そんなことがあったな…と新一はいまになってつぶやく。

そして、新一は小さなキスを蘭の頬に落とした。

「まだわからないんだな。小さなラブレター。」

この幸せ者。」

新一はそついうと蘭の横で寝た。

「ありがとな、手紙。」

小さなLove letter（後書き）

小さい頃の蘭と新一を書いてみました。
変な文章があつたら教えてください。

決まっていること(前書き)

WISHO2さんからのリクエストです！

決まっていること

「ねえ新一…。」

「んだ？」

「みてよ、きれいだよ？」

「何がだよ」

「ほら、雪よ！」

「ふーん」

見ての通り、新一はあまり関心がなく、ただ、敬愛するシャーロック・ホームズの「緋色の研究」を読んでいた。

蘭は新一の答えにむかっと来て

「何よ、本当に関心がないのね…」

とあきれ半分でその場を離れた。

「おい、蘭！まてよ！ったくよぉ、本当のこと言っただけじゃねーかよ。」

新一はそういうと本を机に置き、蘭のもとへ行った。

一応これでも恋人同士などである。

でも、ラブラブな毎日で第三者からみているとうらやましいような恥ずかしいような…？という感覚。

次の日―。

「らーん！あんたたち、恋人になったんだって！？」

2人で投稿して、教室のドアを開けたとたん、蘭の親友で新一の悪友でもある園子がいきなり言いだした。

その声に、教室にいたクラス全員が2人に目線を動かした。

「ほんとかよ！？」

「きゃー！やつとなつたのね！」

「いやー、おめでたい！」

みんな分かりきっていたような声や顔をして2人にからかってくる。

「それで？お二人さん！あなたたちどこまでいったわけえ！？」

「「は？」」

2人は同時にまぬけな声を出す。

その声に園子はずまらなそうに、

「まさか…まだ何もしてないんじゃないでしょうね！？」

と言った。

2人は何も言わずに顔を合わせて真っ赤になった。

まるでユデダコ。

そんな二人にクラス全員が笑った。

「なにになに！？何にもやってないわけえ！？」

「そ、そんなわけ…！」

蘭が一生懸命言おうとするが、何をしたことまでは言えない。

「じゃあなんなのよお！何をしたわけ？」

「うう・・・」

言葉に詰まる蘭と新一。

そんな二人にクラス全員はからかいまくるのである。

園子は二人には貸せようと一生懸命だった。

その時、教室の前扉が勢い良く開いた。

「おーい！みんな、何をしている・・・」

「先生！2人が恋人同士になったんです！今、恋人になって何をしたのかはかせている真っ最中です！」

先生、いいですよ？はかせても！」

「・・・うむ・・・よしとしよう！はいたら教えるよー！」

と先生は機嫌よく教室を出て行った。

いいんかよ、せんせいがそれで！！（いいのかな、先生がそれで！）

2人は同時にそう思った。

「それで？蘭！新一君！何よー！何したのよー！」

園子は乗り気で聞いてくる。

その反対に蘭と新一は真っ赤になりながら、気まずそうだった。

「なんなら、ここでキスしちゃいなさいよ〜!」

「はあ!?!」

またここで2人で同時に言葉が出る。

「はいはい!キスしちゃって〜!」

「やれよ、工藤!」

「蘭ちゃんやんなさいよ!」

「キース!」

「キース!」

「キース!」

クラスがキスコールを始める。

新一と蘭はどうしていいのか分からなくなった。

「この場でキスしたくなかったら、はくのよ!」

「・・・わかったよ、はくよ、すべて・・・」

そう言い出したのは新一だった。

蘭はええ!と反対していたが、新一がもう言ったので仕方なく動じることにした。

「キスも何回かした。一緒にだって寝てる...」

「それでそれで!?!」

「その後は言えない...」

「あ、やっぱり〜!?!」

その途端、クラスは大賑わいになった。

2人は顔が真っ赤で何も言えずにただただ、黙っていた。

その後、クラスからのキスコールにより、仕方なく、2人は口づけを交わしたのであった。

決まっていること（後書き）

どうでしたか、WISHO2さん！
案外ラブラブなんです！

誰が好き…？（前書き）

新一のことを思う、蘭の気持ちです！

誰が好き…？

「新一は…私のこと好き…？」

蘭は、震える声で新一に聞いた。

「バー口。」

新一が鼻で笑い、答えを出す…。

さかのぼること一時間前。

新一が志保と仲良く街をあるつていたのだ。

そのようすをたまたま、蘭が目撃してしまった。

蘭は新一が浮気をしているのではないかと思った。

しかし、蘭は怒りよりも悲しみにあふれている。

自分より、志保を選んだのである。

婚約までしているに関わらず、志保と一緒に仲良く歩いているとは悲しくなる。

「新一…？」

「ら、蘭！？」

「蘭さん!!?」

三人で驚いている。

これでは三角関係ではないか……。

「どうして…新一と志保が…?」

震えた声で言う蘭。

新一はどうする事も出来ずにあたわたしている。

志保は眼を見開いていた。

「こ、これには、分け合っ……」

だっ!

蘭は新一の話を聞かずに町の中を走って行ってしまった。

新一は蘭を追いかけようと必死で走って行った。

志保はハアとため息をもらしながらあきれていた。

この志保のあきれには何の意味があるのかは、この二人の追いかけてこの後で…。

「おい蘭! までよ!」

新一が必死の思いで蘭の腕をつかむ。

蘭はつかまれた腕を振り払おうともがいている。

そして、今に至る。

「新一は…私のこと好き…？」

「バー口。」

「私は…新一が好きだよ？でも、志保のことが好きなら…新一の好きなようにして…。私の幸せは、新一が幸せなことだよ。」

蘭は半ば泣きそうな顔をして言う。

しかし、新一はふつと鼻で笑った。

「…好きじゃねーよ。」

新一の言葉に蘭は眼を見開き、うつむいた。それを見て新一は、
「ただ…愛してる。」

「え…？」

蘭は顔を上げた。

その顔はかわいらしかった。

「好きななんてものじゃない。愛してるんだよ。」

「でも・・・どうして？どうして志保と一緒にいたのよ？」

「・・・ほらよ。」

新一の手には縦長の箱があった。

蘭は？を浮かべると静かに受け取った。

「何...？これ・・・」

蘭は恐る恐る箱を開けてみると、そこにはあまり派手ではない、ダイヤモンドやパールなどが入れられてあるネックレスがあった。

「こ、これ・・・？私に...？」

蘭は驚きを隠せない様子だった。

「今日は蘭の誕生日だろ？だからさ、宮野に蘭の喜びそうなのを選んでもらったんだよ。」

「し、新一い...ごめんなさい・・・！」

「いいって蘭！」

その途端、新一は蘭の唇を奪った。

わかつただろうか、志保があきれた理由が。
蘭の単なる誤解から始まったはなしでした。

休日はあなたと共に（前書き）

星野由香里さんからのリクエストです！
2人のお出かけ中です！

休日 あなたと共に

「新一い！こっちだよ！」

蘭が片手をあげて、新一を大声で呼ぶ。

新一は走って蘭のもとへやってくる。

「わりいわりい！」

「めずらしいね、新一が遅れるなんて…なんか嵐でも来るのかしら？」

「ンだよ…」

新一はそれでもなんだか嬉しそうだった。というよりも、緊張しているというのか…？

一通り乗った後、蘭はトロピカルランド有名のお土産屋さんでいろいろ見ていた。

新一はへとへとでベンチでゆっくり座っていた。

買い物が終わらせた蘭を見ると新一はいきなりぴしっとして、蘭の腕を無理やりつかみ、何も無い広場へと向かった。

蘭はいきなりのもので何にもわからず、されるがままになっていた。

「ちょっと新一！何すんのよ！」

恋人になっても喧嘩の絶えない2人。

だが、今回は違った。

新一は反論してこないのである。

蘭は驚いて、まさかと思った。

（まさか新一…別れようって言っじゃ・・・）

蘭はそんなことを考えていた。

怖くてさびしくて何にも言えない蘭。

一方でこちらの新一は緊張で何にも言えないである。

2人で黙りこくっては、どうにも進まない。

「ねえ、次、名に乗る!？」

沈黙を破ったのは蘭だった。

「あ、いや!今はなさなくちゃいけないんだ!！」

新一はすごく真剣な顔をしている。

蘭はそんな新一を見て、確信した。

別れを告げ気なのだと。

「新一……」

「俺……」

蘭を愛してる…！世界中のだれよりも。だから…

結婚してほしい！」

「え……？」

蘭は予想もしていなかった出来事が起こり、何も言えずにいた。

「よ…喜んで!!」

新一は蘭の返事を聞いたとたんに思い切りキスをした。

キスをした時、広場の外から水が噴き出した。

とても素敵な光景をこっそり園子が見ていたとは知らずに・・・

その後、休日のことクラス全員にからかわれるのであった。

休日はあなたと共に（後書き）

どうでした？星野由香里さんの思った通りになればいいですけど…

永遠の憧れ（前編）（前書き）

今回は、新蘭ではなく、蘭と志保の友情です。

前の、園子と蘭の話で、園子を志保にしたような感じですね…
志保視点です。

コナンから新一に戻り、新一は蘭と婚約までしている設定です。

永遠の憧れ（前編）

工藤君が元の姿に戻ってもう4年。

大学生の工藤君。

その工藤君には婚約者がいる。

その婚約者は、私の永遠の憧れである、蘭さん。

蘭さんは私を黒の組織から命がけで助けてくれた。

拳銃で撃たれたのが、狙われた私でなく、蘭さんだった。

不幸中の幸いで、蘭さんは命を落とさず、三ヶ月間の入院だった。

蘭さんは強い。

私は未だに闇の中にいる。

すぐく…すぐく遠い感じがする。

彼女は天使。

私は悪魔。

これで私と彼女は対立する羽目になる。

私は蘭さんに勝てるはずがなかった。

なのに…

工藤君を愛してしまった。

蘭さんの最愛の彼を愛してしまった。

別にとる気はない。

でも…

どうしようもなく愛してしまった。
どうしてこんなにあなたは私の中で大きくなってしまったのだろうか？
私には理解できなかった。

「志保！」

「蘭さん…」

蘭さんは笑顔で私の名前を呼ぶ。

その反対に私は少し嫌そうな顔をしていることを、自分でもわかった。

「志保、これ！」

渡されたのは、いちまいの封筒だった。

「何？これ。」

なんとなくわかりそうだった。

あの二人のことだ。もう進んでいるにきまっている。

私は恐る恐る中身を見てみた。
すると・・・

『結婚招待状
杯戸教会にて

工藤新一 毛利蘭
』

予想していたことがあつた。

そして、一番いやなことがあつた。

「・・・結婚…」

「そうっ！よかったら、志保の来てね！」

「そう…結婚するのね。」

「どうしたの？し．．．」
「ふざけないでよ！！！！」

「志保…？」

私はついつい怒鳴ってしまった。
でも、もう言ってしまったおう。
ここまで言ってしまったんだから。

もう、いつもの冷静な私ではなかった。

「あなたたちが結婚！？」
ふざけないでよ！人の気持ちもわからないあなたたちが幸せになれ

るわけ！？

ていうか！あなたと工藤君がお似合いとは思えない！」

「し、志保……」

「名前を呼ばないでよ……！」

「じゅめんね……」

「謝ってすむ問題じゃないわよ！」

「ごめん…ごめん…」

蘭さんは泣いていた。
やばい…何言ってるのよ、私…

口が勝手に…

「今すぐ結婚を破棄し、私と工藤君の婚約を進めるのよ！」

「うめん…うめん…」

蘭さんは悪くない！

私が悪い…！

でも…もしかしたら・・・今言ってることは私の本音なの…？

「早くして…」

「・・・わかった…」

「ありがとう、蘭さん。さすが、優しい人なこと。」

私が代わってしまふ。

今の私は本当の私？

ちがつわ…！

お願いだから…戻って…本当の私に…

永遠の憧れ（後編）（前書き）

前編の続きです。

永遠の憧れ（後編）

蘭さんと工藤君の結婚が破棄になったのはつい一週間前。
蘭さんは私のことを工藤君に言わなかった。

そして、工藤君を避ける蘭さん。

なんだかつい鼻歌を歌う。

「工藤君、ちょっと今日付き合ってくれるかしら…？」

「あ、ああ・・・」

蘭さんとの結婚が破棄になって私のほうにも目を向ける工藤君。

とてもうれしくて仕方ない。

「なあ、蘭！」

「・・・」

「一緒にショッピングいかなーか？宮野と一緒に・・・」

「ごめん・・・行けない・・・」

「そっか・・・」

工藤君はなんだか悲しそうだった。
そうさせたのはすべて私。

でも、蘭さんは私のことを工藤君に言わなかった。
どうして…？

「志保…ちょっと話があるの。」

「ええ。いいわよ？」

有頂天の私は裏庭へと向かった。

「それで？何かしら。話つて。」

「新一が好きなんでしょ？」

「ええ、そして、彼も私のことを愛して……」

「そんなのわからないじゃない。」

冷たく言い放つ蘭さん。

「蘭さん……？」

「私だって新一が好き！あなたのものだけじゃない！そして、私のものだけじゃない！」

「蘭さん！なら、あなたと工藤君はお似合いだっていうわけ！？」

「そんなのわからない！でも……もし。もし、新一が私のことを愛してくれるなら、私は彼と結婚したい。」

蘭さんの意見は正論であった。

私は、蘭さんを苦しめていた。

「ごめんなさい、蘭さん…！」

「私のほうこそごめんね、志保。」

「私…勘違いしてた。」

「いいの！志保。結婚式、来てくれる？」

「ええ！もちろん！」

私、勘違いしてた。
ばかだな。
蘭さん

ごめんなさい。

だから、私は2人の結婚を温かく見守る。

そして、2人の幸せを願う。

永遠憧れさん。
おめでとう…

初恋（前書き）

オリキャラ登場！簡単に終わらせちゃいます。

初恋

あたしの名前は山田光海。

大阪から来た、帝丹高校二年生や！

そんな活気な私にも初恋が訪れたんや。

相手はあの、工藤新一君！ほーんまカッコええんや！

でもな…ライバルがおるんや…。

毛利蘭ちゃん。

ほーんまカワええ子やで？

「工藤君、ほんまはだれが好き…？」

甘い声で言っただあし。

「俺は…」

あたしが好きなんやろ？

「蘭…が好き…。」

「え…？」

あたしやナイン？

あたしやのうて、毛利さん…？

「蘭は優しくて強くて泣き虫で意地っ張りで…俺の最高の相手だよ。」

「そ、そか・・・」

なんでなん？なんであたしやない…？

あたしの初恋はこの時、一瞬にして終わってしもたわ…。

でも、その後、三か月後、あたしは彼氏ができる。

相手はあたしの幼稚園から一緒の人。

ほんまはもしかしたら、こいつが好きやったのかもしれへん…

工藤君は単なる練習相手やったのかも…

あ、別に悪い意味やナインよ？

でもな、あたしは今、そいつしか見てへんで？

だって、好きなんやもん！

初恋（後書き）

短い初恋でしたね…

好きという気持ち

「好き」

この言葉を口にしたとき、自分の目の前にいる相手はどんな顔をしましたか？

顔を赤くしましたか？

ふんつと聞いていませんでしたか？

申し訳なさそうな顔をしていましたか？

いきなり抱きしめられましたか？

その場から立ち去りましたか？

その場にはもういませんでしたか？

いろんな場合があります。

好きとは、人間誰しも思う気持ち。

この気持ちは決して捨てていけない花。

この花を捨てることは、失恋と同じショックを受ける。

失恋するのが怖いから。

ショックを受けるのが怖いから。

そうやってにげるからいけない。

戦えばいいではないか。

どうして戦わないんだ。

逃げたって

走ったって

避けたって

そんなものは無意味である。

好きという気持ちは忘れてはいけない。

そんな感情はとっても素敵なこと。

その気持ちを大切にしなければ、必ず後悔する。

自分はいったい誰なのか、誰が好きなのか…。

今決まっていなくても、
いつかは現れる、運命の人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6030y/>

好きな人

2011年12月2日17時49分発行